

金網集の研究

——「華嚴宗見聞」を拝して——

中 條 暁 秀

(目次)

(一) はじめに

・ 日向の伝

・ 日向の著述

・ 金網集の写本

・ 金網集底本系遺文

・ 検討

(二) 日進本と日王丸本について

・ 構成と同異

(三) 引用経論釈について

・ 「華嚴宗見聞」が引く典籍について

・ 「大三界義」について

・ 「弘決外典抄」について

(四) 日蓮遺文との関連について

・ 開目抄を視座に据えて

(五) むすび

(一) はじめに

——日向の伝——

佐渡日向(一二五三～一三一四)は、三十歳にして日蓮の遷化にあい、六老僧の一人として守塔輪番の班に列せられたが、偶々有縁の地である上総茂原の領主斎藤兼綱の屈請で妙光寺に住し、この地に法幢を掲げたのである。

祖滅三・四年頃、招かれて身延山に登り、学頭として日興を扶け、後、正応元(一二八八)年白蓮日興の身延退出に伴い、地頭の波木井実長と相談の上、身延山第二世の法燈を継承している。

時に三十六歳、身延山の経営と教学の興隆に尽力し、在山二十六年、法燈を大進日進(一二七一～一三三四)に譲り、自ら上総法華谷に退き、正和三(一三三一四)年九月三日化、寿六十二歳。

—日向の著述—

日向の著述は、『金網集』十巻が有名、他に『日蓮聖人行業記』があるが、名を残すのみで現在一切不明。そして、日向に仮托された後世の成立の『御講聞書』九十ヶ条がある。

—金網集について—

金網集は、日向が日蓮晩年の身延山西谷での講義を自ら見聞するところを記したもので、内容的には諸宗の大綱を明瞭にすることがその主眼である。要は、諸宗対論用意のための素材として編まれたものと考えられよう。

—金網集の写本—

金網集全十巻は、『日蓮宗々学全書』一三・一四巻に収録。その収録されているものは、身延山久遠寺に現存する日王丸本・日進本・日善本・日全本・日定本・日悟本・日肝本・筆者未詳本、東京堀之内妙法寺の日進本、京都本法寺の日祐本、上総茂原藻原寺の藻原抄本、等々祖滅四十六年から二百年までの古写本を、総合補綴して整備したものである。

—金網集底本系遺文—

金網集には、日蓮遺文と共通する文がかなりある。例えば、代表的なものとしては『法華真言勝劣事』(定遺三〇二〜三三〇頁)・『真言見聞』(定遺六四九〜六六〇頁)・『本門戒体抄』(定遺一七二〜一七八頁)の三遺文は、金網集と全同。しかも、これら三遺文は日蓮の撰ではなく、金網集を底本として

成立した遺文である。したがって、筆者はこれらの遺文を、金網集底本系遺文と称している。

すなわち、『法華真言勝劣事』と『真言見聞』は、宗全三巻所収の金網集第六「真言宗見聞」と同。『本門戒体抄』は、宗全一三巻所収の金網集第二「小乘三宗見聞」と同。その他、部分共通乃至類似のものは数多くある。⁽¹⁾

—検討—

金網集の冒頭に位置するのが「華嚴宗見聞」第一(宗全二三巻所収)である。そこで拙稿は、「華嚴宗見聞」を視座に据え、(a)日進本と日王丸本について、(b)引用経論積の問題について、(c)日蓮遺文との関連について、の三点に問題を絞り、少しく考察するものである。

(二) 日進本と日王丸本について

金網集第一に「華嚴宗見聞」(二巻)がある。日向の直筆本は伝わらぬが、日向の愛弟子身延山第三世大進日進の筆になるものが東京堀之内妙法寺に現存。もう一本は、日王丸(伝不詳)の手になるものが身延山に蔵されている。

両本の奥書をままとめると左の通りである。

金網集	書写年月日	筆主	所蔵
(日進本) 華嚴宗見聞	建武三年十一月	身延三世大進	堀之内妙法寺
			宗全一三巻
			五七頁

さて、金網集の「華嚴宗見聞」の構成は、『日蓮宗々学全書』一三巻の「条目」(二頁)によれば、二十五の項目から成っている。

そして、日進・日王丸の両本を比較対照して見ると、必ずしも両本同一ではなく、幾つかの存没が見られる。今、その主たる個所を述べれば、

まず日王丸本についていえば、項目1、「釈尊系譜事」と項目2、「八相成道年紀異説事」は、巻初(二頁)から一〇頁四行に至る全文、項目22、「記小久成之破折」の全文(四八頁三行〜五〇頁五行)が欠。

次に、日進本についていえば、項目11、「華嚴祖師製作書」の五〇頁六行以下五二頁三行に至る全文が欠。
 など、注意を要する処がある。

しからば、日進及び日王丸が書写するに当って底本となつた金網集は同一のものか否か、興味あるところである。当然元は一本であろうが、金網集は身延門流の秘書として相伝された、いわゆる「相伝書」である。なるがゆえに、伝写を重ねる段階において、増幅・割愛がなされて、幾つかの系統の金網集が生じたものでなからうか。

現時点の筆者の印象を申せば、両本はそれぞれ伝写の系統

を異にした金網集に依拠していたもののように思われる。なお、拙稿は宗全一三巻所収の「華嚴宗見聞」を用いての検討となる。

(三) 引用経論釈について

周知のように、日蓮の弘教の基本姿勢は折伏にある。したがって、その教学の大きな特色の一つに、十分に吟味された経論釈を援引して、自説の援証とする文証主義がある。

この精神は、金網集「華嚴宗見聞」にも継承されている。端的な個所を一点挙げれば、項目22、「記小久成之破折」中という、

人師之胸説不可用之、依法不依人是也、(宗全一三—四八頁)に象徴されよう。

さて、前に筆者は、金網集は諸宗対論問答用意のための素材として編まれた、と述べたが、金網集「華嚴宗見聞」には、華嚴経を中心とした典籍が列挙され、膨大な書冊が引用されている。よって、以下の四点(1)「華嚴宗見聞」が引く典籍について、(2)『大三界義』について、(3)『弘決外典抄』について、(4)『華嚴宗立祖義』について、を検する。

—「華嚴宗見聞」が引く典籍について—

「華嚴宗見聞」が引く典籍は、華嚴経(六十華嚴・八十華嚴・四十華嚴)、華嚴五教章、華嚴経疏、華嚴宗立祖義、新華嚴経

論(金網集は合論という)

法華経、梵網経、無量義経、普賢菩薩証明経、阿育王経、浴仏功德経

十住毘婆娑論、大智度論、僧史略、法華五百問論、摩訶止観、法華文句、法華玄義、金剛般若経疏(智顛撰)、開皇三寶記

弘決、文句記、唐大和上東征伝

法華秀句、守護章、依憑天台集、天台法華宗義集、義綱集、法華迹門観心絶待妙积、一乗要決、大三界義、弘決外典抄、などである。

そして、これら引用経論积の出典等の確認の出来るものはいいが、八点確認の出来ぬものがある。例えば、因果経、本起因縁経、瑞応経、仏任論、周記、釈靈実年代記、文選頭陀寺碑文、薩婆多論、などである。しかも、これらは項目2、「八相成道年記異説事」に集中している。

―『大三界義』について―

金網集の項目1、「釈尊系譜事」の冒頭から大幅に引用される典籍が源信(九四三―一〇一七)著の『大三界義』である。この『三界義』(『恵心僧都全集』第三卷所収)は、源信が欲界・色界・無色界について、俱舍論を始め、大小乗の諸経論章疏に依る資料的論究で、その細目は六十三に亘り、通

計、百九十五問答より成るものである。⁽²⁾

そこで、金網集が引く『三界義』は、その細目53、「一大阿僧祇之事」、細目54、「劫初以後三種次第之事」について問答するところのもので、全同。図示すると左のごとくである。

『三界義』(恵全三卷)

『金網集』(宗全二三卷)

六五八頁八行―六六二頁

一頁五行―四頁一行

一〇行

ところで、この『三界義』の日蓮遺文での引用は、管見の限りではあるが、前に述べた金網集底本系遺文の一つである『真言見聞』(定遺六五二頁、宗全一三―二七頁)のみではなからうか。加えて、引用箇所も前出の細目54、「劫初以後三種次第之事」と同。となると、『三界義』は日蓮遺文には引かれず、金網集のみの引用とならうか。

―『弘決外典抄』について―

金網集の項目2、「八相成道年記異説事」中に、

弘決外典抄第三云、牟尼位居太子、身證三尊、當昭王之盛年、

為閻浮之教主、周書異記云、周昭王二十四年甲寅之歲四月八日、

江河泉池忽然汎漲、井水並皆溢出等(宗全一三―四頁)

と、『弘決外典抄』(写本立正大図書館蔵・抄二一九左右)が引用されている。

周知のように、『弘決外典抄』は村上天皇の皇子具平親王

(九六四〜一〇〇九)の選述にかかるもので、『止観輔行伝弘決』の中の外典を抄出して注釈したものである。その執筆の動機・目的はその「序」に、

去年有二僧一相語曰我宗法文多引外典就中弘決輔行記太為繁
粹一後來末学不_レ必_二兼習_一況_二転写_一之間点画多誤披說之処文義易_レ迷
羨_レ勤_二本_一書以_レ決_二疑滯_一余自知_二不_レ及_一再_二三辭謝_一然而苦_レ請_二不_レ休難_レ
得_レ默止_二今直鈔_一外典之文_二引_二本_一書_二而注_レ之_一(写本立正大図書館
藏・「序」)

とあるによつて、また、

先写_二本_一敬贈_二多武峯_一賀公_二(写本立正大図書館藏・「序」)

とあるから、多武峯の増賀上人の何らかの働きかけによつて、本書が成つたことが推察される。

そして、この『弘決外典抄』には、引用される外典として六〇部にもぼる書目が列挙されており、止観の研究には外典の知識が必要であることを示している。ところが、宝地房証真(生没年不詳平)が、『止観私記』に、

此中弘決所_レ引外典。別有_二親王抄注_一。再不_レ論_レ之。(大日本仏教
全書二二一七八七頁下)

という研究方針を示して以来、『弘決外典抄』が直ちに止観の思想を求明するためのものではないという認識が一般化され学者の間で等閑視されていったようである。

翻つて、日蓮遺文の『佐渡御書』の冒頭には、

金綱集の研究(中 條)

外典抄・文句一・玄四本末・勸文・宣旨等これへの人々持ちて渡
らせ給へ(定遺六一二頁)

とあり、追申には、

外典書貞觀政要すべて外典の物語、八宗の相伝等、此等なくして
は消息もかかれ候はぬに、かまへてかまへて給候べし(定遺六一
九頁)

とある。この場合の『外典抄』、今いう『弘決外典抄』なのか、それとも唯単なる仏教以外の典籍の称なのか、興味深い。

中山三世日祐(二二九八〜二二七四)の『本尊聖教録』には、『外典抄要文』(定遺二七六頁)、『外典要文』(定遺二七三九頁)、『外典聞書』(定遺二七四〇頁)の書目が見え、また、『弘決外典抄』の一本が、いつの頃からか身延山久遠寺経藏に架蔵され、宝永四(一七〇七)年多武峯寿命教院沙門光榮は、身延山第三十三世遠沾院日亨(一六四六〜一七二二)から同寺に本書の蔵するを知つて、これを底本として『弘決外典抄』を上梓するに至つた。本書が金綱集に引用されていることは、日蓮が身延山西谷で講義をなされていた時、既に身延山にあったものと考えられる。

—『華嚴宗立祖義』について—

『華嚴宗立祖義』は、金綱集の項目19、「法華華嚴勝劣事」にある。すなわち、「華嚴宗立祖義云了浩(洪)述」として、

原夫仏之出世本意、為二大華嚴二故、○我宗諸祖示迹本意、亦為レ
 弘華嚴二故、○凡皆為レ尊二華嚴也、前古判教理義起盡無レ出天
 台一独未レ盡二華嚴之意、皆未レ得意者也（宗全一三—三六頁）

と述べ、天台否認の語を掲げている。この了浩（トウ）という人物、伝不詳。また、著述等一切不明。にもかかわらず、日蓮の著述の三ヶ所に『華嚴宗立祖義』が引用されている。

一つは、「此事日蓮当身大事也」（定遺七二頁）という『観心本尊抄』の十八番問答の問のところに、

了洪云天台独未レ盡二華嚴之意、等云云。（定遺七〇八頁）

と引かれ、

二つは、金綱集が編まれた理由と同じではないかと思われるが、諸宗破折のために、諸宗所依の経論釈から要文を引用し、諸宗の教義の論拠を示したものといわれる『注法華経』の「結卷」のところ二ヶ所（山中喜八氏編著『定本注法華経』下巻一五九—二・六二九頁）、○印を含めて、金綱集と全同の文がある。

正にこれらは、『日蓮遺文』・『注法華経』・『金綱集』という三者の緊密な関係を示す証左となろう。

(四) 日蓮遺文との関連について

「日蓮一期大事」（定遺五六—一頁）といい、「かたみ」（定遺五九〇頁）ともいう『開目抄』に注目して、金綱集の華嚴宗見

聞」との共通乃至類似部分について主たるものをまとめる

『開目抄』（定遺）

『金綱集』（宗全一—三卷）

五四—一頁

二六—七・四八頁

五五—二頁

二四頁

五七—九頁

五〇頁

となる。他、細かな共通乃至類似の箇所は多々あり、『顯勝法抄』・『聖密房御書』・『報恩抄』等々中にも幾つか見られる。その具体的な報告は稿を改めるとして、金綱集にしても日蓮遺文にしても、対華嚴宗の基本姿勢は、

(1) 『開目抄』が「経ハ権経」（定遺五七九頁）、金綱集は「己カ経ノ権教ニシテ」（二三卷—二二頁）・「日本国ノ華嚴宗ハ小乗也」（同一五二頁）との言である。

(2) 『開目抄』が「華嚴……二乗作仏を隠のみならず、久遠実成を説かず」（定遺五五二頁）との言に添うように、金綱集も項目17、「二乗不作仏文」・項目22、「記小久成之破折」の項を設けて、同趣の批判を展開している。

等、それは正に同といえよう。

(五) むすび

如上の検討を踏まえ、興味ある数項を列挙してむすびとする。

(一) 金網集の日進本・日王丸本を拝しての印象であるが、両本は伝写の系統を異にした金網集に依拠していたもののように思われる。

(二) 金網集が引用する『弘決外典抄』は、『佐渡御書』にいう「外典抄」とイコールなのであろうか。

(三) 「華嚴宗立祖義 了浩述」の一連の文を通じて思うことは、『注法華経』・『日蓮遺文』・『金網集』と、三者それぞれ密接な関係にあることが確認される。

1 拙稿「金網集の一考察」(四三七～四五四)『日蓮教団の諸問題』を参照されたい。

2 八木吳恵氏『恵心教学の基礎的研究』(四一五～九)を参照されたい。

3 納富常天氏「東国仏教における外典の研究と受容」(一一六～七)『金沢文庫資料の研究』を参照されたい。

4 『日本仏教典籍大辞典』(一三〇～一)を参照されたい。

5 『日蓮聖人遺文辞典』(三〇〇～一)を参照されたい。

なお、『昭和定本日蓮聖人遺文』は定遺、『日蓮宗々学全書』は宗全、『恵心僧都全集』は恵全、とそれぞれ略称した。

〈キーワード〉 弘決外典抄、三界義、日向

(身延山大学教授)

新刊紹介

平川彰著作集 第一六卷

二百五十戒の研究 III

A 5 版・六三五頁・定価一一、三三〇円

春秋社・平成六年一月

平川彰著作集 第一七卷

二百五十戒の研究 IV

A 5 版・六五六頁・定価一一、八四五円

春秋社・平成七年一月